

〔原 著〕

第1子出生による家族の適応過程

渡辺 裕子* 鈴木 和子* 前原 澄子** 森 恵美**
江守 陽子** 茅島 江子** 工藤 美子**

Family Adaptation Process Subsequent
to the First Child Birth

Hiroko WATANABE*, Kazuko SUZUKI*,
Sumiko MAEHARA**, Emi MORI**,
Yoko EMORI**, Kimiko KAYASIMA**,
Yoshiko KUDO**

要 旨

第1子出生による家族の適応過程を明らかにするため、14家族を対象に、既存の家族ストレス理論モデルを基盤にした半構成面接を行った。分析方法は、家族ストレス、家族資源、ストレスの認知、対処行動、家族適応に関して意味のある文節を選び出してデータ化し、共通する内容と意味を抽出する方法で行った。

その結果、①家族ストレスとしては、生活行動の再編成の要求 ②対処資源としては、個人・家族・親族・コミュニティ資源 ③ストレスの認知としては、脅威となるか否かの評定 ④対処行動には、行動的対処としての生活全般における新たなバランスの獲得及び認知的対処としての価値の転換、積極的解釈などが得られ、⑤家族適応として、家族の統合性の促進という意味が明らかになった。

これらの結果から上記の内容を加えた家族の適応モデルを作成した。

Key Words: Family Nursing 家族看護

Family Adaptation Process 家族の適応過程

Child Birth 児の出生

I. 緒 言

1. 研究の背景

近年のわが国における家族をとりまく状況は、核家族化や少子化、女性の就労率の増加、価値観の多様化など、大きく変化してきている。これに

伴って、家族における出産とその後の育児の位置づけは、家族成員が一人増えるといった喜ばしい側面ばかりではなく、大きなストレス要因であり、家族機能の破綻を来すような危機状態に陥る可能性を高めるものとなっている¹⁾。実際に、乳幼児の虐待など、家族の子育てに対する不適応から生じる問題が確実に増え続けている²⁾。看護の立場からも、家族が本来持っている力を引き出し、子どもが健やかに育つことを支援する援助が強く求められていると言える。

一方、近年の家族を対象とした母子看護領域の

* 千葉大学看護学部家族看護学(千葉銀行)講座

** 千葉大学看護学部母性看護学教育研究分野

* Department of Family Nursing (Chiba Bank)

** Department of Maternity Nursing, School
of Nursing, Chiba University.

研究の動向をみると、養育期の家族を取り上げたものでは、病児をもつ母親に焦点を絞ったものが多く³⁾、一単位としての家族が児を健康に育てていくことをテーマにした研究はなされていない。前述した社会的なニーズに応えるためには、家族の生活が児の出生によってどのように変化し、その変化にどう対処するのかという新しい家族成員を受け入れる家族の適応過程を明らかにすることが重要である。

家族周期における養育期のなかでも、児の出生直後からの数カ月間は、特に家族の生活が大きく変化し、それへの対応を否応なしに迫られる時期である。援助ニーズの大きいこの時期にあり、さらに最も基本的な家族形態である核家族で、しかも、初めて育児を体験する第1子を養育している家族を対象に、育児に対する家族の適応過程を明らかにしようと考えた。

2. 研究の枠組み

(1) 研究の前提としての家族に関する理論的枠組み

本研究の前提としての家族に関する理論的枠組みとして、以下の2つを採用した。

①家族を、生物系の社会システムとして相互に密接に作用し合い、依存し合っている個人からなる小集団とみなす家族システム理論⁴⁾ ②家族生活を時間の経過にそって段階ごとに家族システムの変化を捉える家族発達理論⁵⁾。

(2) 研究の理論的枠組み

本研究では、育児という新たな役割が加わることによって生じる家族内部の現象を分析する枠組みとして、Hillの家族ストレス理論モデル⁶⁾ 及び McCubbinの二重ABCXモデル⁷⁾を基盤に、第1子を養育する家族の適応モデルを作成した。(図1) すなわち、McCubbinは、対処行動を、家族によってなされる状況の定義を基礎として家族内・外の資源を動員して行われるとし、「対処」を家族資源とストレスの認知の中間に位置づけている⁸⁾ ことから、第1子を養育する家族の適応モデルにおいても「対処」を同様に位置づけた。また本研究では、ストレスを児の出生によって家族に要求される生活上の変化とし、研究

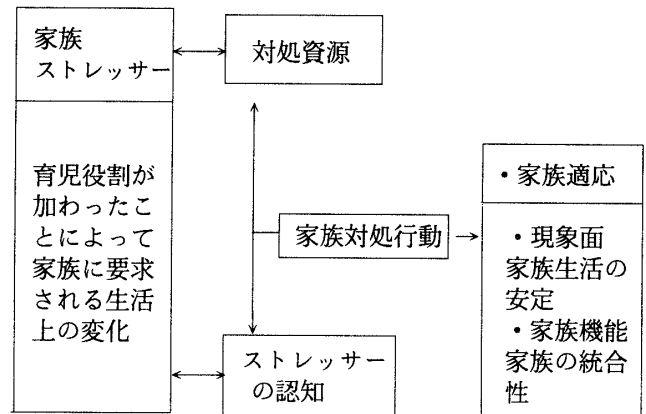


図1 第1子出生による家族の適応モデル

対象が、危機に陥ることなく育児による生活の変化に適応している家族であることから、Hillのモデルにおける、一連の相互作用の結果として生じる危機、あるいは危機でない状況Xを、家族適応と置き換えた。そして、この家族適応を、以下の2点によって捉えた。①家族と家族成員が、生活上の変化に伴って派生してくる要請に応じて家族成員同士の行動や家族外への態度を修正し、安定状態に至る⁹⁾ という現象面の特徴②家族統合の維持または強化という家族の機能水準による特徴⁹⁾

3. 操作的定義

家族：乳児を養育している夫婦とその子

家族ストレス：育児という現実の認知された要請からもたらされた緊張状況またはそれへの反応

家族適応：育児に慣れ、新たな生活のパターンを獲得していくこと。

家族対処行動：家族成員が育児による生活上の変化によって生じたストレスを緩和したり解決したりするために採択する、望ましい問題解決的な行動や認識

II. 研究目的

1. 児の出生によって家族に、どのような生活上の変化が要求されるのか。

2. 児の出生によって生じた家族生活上の変化に対する要求を家族成員がどのように認識し、どのような家族資源を用いて、どのように対処し、適応に至るのか。

3. 家族対処行動の結果、家族の結びつきや家族や家族成員の内面がどのように変化するか。

上記1～3を明らかにし、第1子出生における家族の適応過程を明らかにする。

Ⅲ. 研究方法

1. 研究対象

研究に同意の得られた、C県在住で生後3～4カ月の健常児を育て、しかも育児による家族生活の変化に適応していると判断した14家族を対象とした。なお判断基準は、育児に慣れ、新しい生活パターンが出来上がっており、育児に起因するストレスによって、夫婦の健康がそこなわれていないという条件を満たすものとした。

2. 研究方法

1) データ収集方法 対象家族の家庭を訪問し、予め用意した調査用紙に従って妻に対して半構成面接を行い、妻自身と夫や家族に関する情報を得た。面接内容は、面接終了後速やかに詳細に記録した。

2) 面接項目

(1) 児の出生によって家族に要求される生活上の変化。(2) 要求される生活上の変化に対する認識。(3) 要求される生活上の変化に対する工夫や努力。これら3点について、①生活全般を通して、及び②家族生活の構造的要因¹⁰⁾について、③健康及び経済状態といった生活基盤、のそれぞれを妻自身について聴取した。また、(3)の項目については、夫についても妻から間接的に情報を得た。(4) 児の出生の前後で妻の夫に対する見方や家族の結びつきがどのように変化したか。

3. 分析方法

(1) 各設問項目ごとに、記載された情報から研究目的に照らして意味のある文節を選び出してカードに書き写し、データ化した。そしてそれを、共通する内容ごとに類別した。さらに、それらの内容に共通する、家族にとっての体験の意味を現象学的アプローチによって抽出した。また、対処行動については、用いられている家族資源と行動の主体ごとにも分類した。これらの分析は、面接により情報を収集した者を含む複数の共同研究者との

検討により、研究の信頼性の確保に努めた。

Ⅳ. 結果

1. 対象家族の概要

夫の年齢は、21歳から42歳で、平均年齢は31.4歳であった。また、ほぼ全員が会社員または公務員であった。一方、妻の年齢は、20歳から34歳で、平均年齢は、27.0歳であった。2名を除き全員が無職であったが、その2名も産後の休暇期間中であった。児の性別は、男児5名、女児9名で月齢は、3カ月児が6名、4カ月児が8名であった。結婚期間は、8カ月から4年4カ月で、平均結婚期間は、2年3カ月であった。

2. 児の出生によって家族に要求される生活上の変化

1) 生活全般 生活全般にわたる変化の要請の内容は、育児役割の付与であり、生活行動の再編成という意味を抽出した。(表1)

2) 生活の構造的要因 ①時間の減少 ②規則性の変化 ③行動の規制 ④共通の話題の増加 ⑤機会の増加という5つの内容に類別でき、これらから、①生活リズムの変化 ②生活行動の変化 ③関心の共有化 ④社会性の促進という意味を抽出した。(表1)

3) 家族の生活基盤 必要とされる体力の増大、及び育児に関わる出費の増大という2つの内容に類別でき、そしてこれらから、強化の要求の増大という意味を抽出した。(表1)

3. 児の出生による生活上の変化の要求に対する認識

1) 生活全般 楽しい、幸せという満足と、物足りないという不満、そして、生活上の変化の要請を当たり前のことと受けとめる受容の3つの内容に類別できた。そして前者の2つから主観的評価を、後者から認知的対処という意味を抽出した。(表2)

2) 生活の構造的要因 ①セルフケアにとって有益 ②セルフケアにとって障害 ③今はがまんしようとする要求のコントロール ④仕方がないという受容 ⑤あえて気にしないという選択的無視 ⑥何とかしたいという改善の要求 ⑦やりが

表1 児の出生による生活上の変化の要求

項 目		内 容		意 味	
1) 生活全般		育児役割の付加		生活行動の再編成	
2) 生活の構造的要因					
ア. 生理的要因	睡眠・休息	・時間の減少 ① ・規則性の変化 ②		・生活リズムの変化 ① ② ・生活行動の規制 ③ ・関心の共有化 ④ ・社会性の促進 ⑤	
	食生活	・時間の減少 ① ・規則性の変化 ② ・行動の規則 ①			
イ. 生産的要因	勤め	・時間の減少 ①			
ウ. 家事的要因	家事	・時間の減少 ① ・行動の規制 ③			
エ. 家政的要因	夫婦の交流	・時間の減少 ① ・共通の話題の増加 ④			
オ. 文化的要因	趣味・余暇	・時間の減少 ① ・行動の規制 ③			
カ. 社会的要因	親戚付き合い	・機会の増加 ⑤			
	近所付き合い	・機会の増加 ⑤			
3) 家族の生活基盤					
ア. 夫婦の健康	必要とされる体力の増大				強化の要求
イ. 経済基盤	育児に関わる出費の増大				

注) ○内の数字は、生活の構造的要因、家族の生活基盤ごとに共通する内容を示す。

い感 ⑧負担感 ⑨プラス面を積極的に評価しようとする価値の転換 ⑩愛情欲求の充足感 ⑪自分や家族にとって有益 ⑫自分や家族にとって無益 という12の内容に類別でき、これらから、①主観的評価、及び②認知的対処という意味を抽出した。(表2)

3) 家族の生活基盤 ①セルフケアの促進 ②選択的無視 ③積極的解釈 ④受容 ⑤家族にとって有効 ⑥楽観的予測という6つの内容に類別でき、これらから①現状認識 ②意識的努力の2つの意味を抽出した。(表2)

4. 児の出生によって家族に要求される生活上の変化に対する家族対処行動

1) 生活全般 ①育児に全力をあげるという生活における優先度の変化と、②育児以外の生活とのバランスをとるという2つの内容に類別できた。

これらから、新たなバランスの獲得という意味を抽出した。(表3)

2) 生活の構造的要因 ①児の睡眠時間や他の生活時間の活用をはかるという時間の確保②規則的生活リズムの確保 ③育児や家事に関する夫婦間の役割分担 ④食生活、家事、家政に関する手間の割愛、機材・消費財の活用といった方法の変更 ⑤食生活や趣味・余暇活動に関する内容の変更 ⑥家事に関する回数の変更 ⑦実家の家事・育児協力 ⑧実家への相談 ⑨友人への相談 ⑩親戚・近所付き合いにおける行動の選択 という内容に類別でき、これらから、①生活時間におけるバランスの確保 ②生活行為の方法の工夫 ③情緒的サポートの依頼 ④慎重な判断 という4つの意味を抽出した。(表3)

3) 家族の生活基盤 ①セルフケアの実施 ②

表2 児の出生による生活上の変化の要求に対する認識

項 目		内 容	意 味
1) 生活全般		満足 ① 不満 ② 受容 ③	・現状認識 ①② ・意識的努力 ③
2) 生活の構造的要因			
ア. 生理的要因	睡眠・休息	セルフケアの促進 ① セルフケアの阻害 ② 要求のコントロール③ 受容 ④ 選択的無視 ⑤	・現状認識 ①②⑥⑦⑧⑩ ⑪⑫ ・意識的努力 ③④⑤⑨
	食生活	セルフケアの促進 ① セルフケアの阻害 ② 受容 ④ 改善の要求 ⑥	
イ. 生産的要因	勤め	受容 ④	
ウ. 家事的要因	家事	受容 ④ 選択的無視 ⑤ やりがい感 ⑦ 負担感 ⑧ 価値の転換 ⑨	
エ. 家政的要因	夫婦の交流	要求のコントロール③ 受容 ④ 愛情欲求の充足 ⑩	
オ. 文化的要因	趣味・余暇	要求のコントロール③ 受容 ④ 価値の転換 ⑨	
カ. 社会的要因	親戚付き合い	自分や家族にとって有益⑪ 自分や家族にとって脅威⑫	
	近所付き合い	自分や家族にとって有益⑪	
3) 家族の生活基盤			
ア. 夫婦の健康		セルフケアの促進 ① 選択的無視 ② 積極的解釈 ③ 受容 ④	・現状認識 ①⑤ ・意識的努力 ②③④⑥
イ. 経済基盤		選択的無視 ② 受容 ④ 家族にとって有効 ⑤ 楽観的予測 ⑥	

注) ○内の数字は、生活全般、生活の構造的要因、家族の生活基盤ごとに共通する内容を示す。

表3 児の出生による生活上の変化の要求に対する対処行動

項 目		内 容	意 味
1) 生活全般		生活における優先度 の変化 ① 育児以外の生活との バランスをとる ②	・新たなバランスの獲得 ①②
2) 生活の構造的要因			
ア. 生理的要因	睡眠・休息	時間の確保 ① 規則的生活リズムの 確保 ② 夫婦間の役割分担 ③	・生活時間におけるバランス の確保 ①② ・生活行為の方法の工夫 ③④⑤⑥⑦ ・情緒的サポートの依頼 ⑧⑨ ・慎重な判断 ⑩
	食生活	夫婦間の役割分担 ③ 方法の変更 ④ 内容の変更 ⑤	
イ. 生産的要因	勤め	時間の確保 ①	
ウ. 家事的要因	家事	夫婦間の役割分担 ③ 方法の変更 ④ 回数の変更 ⑥ 実家の家事・育児協力⑦ 実家への相談 ⑧ 友人への相談 ⑨	
エ. 家政的要因	夫婦の交流	時間の確保 ① 方法の変更 ④	
オ. 文化的要因	余暇・趣味	時間の確保 ① 夫婦間の役割分担 ③ 方法の変更 ④ 内容の変更 ⑤ 実家の家事・育児協力⑦ 実家への相談 ⑧	
カ. 社会的要因	親戚付き合い	行動の選択 ⑩	
	近所付き合い	行動の選択 ⑩	
3) 家族の生活基盤			
ア. 夫婦の健康		セルフケアの実施 ① 夫婦間の役割分担 ② 実家の家事・育児協力③ 実家への相談 ④ 友人への相談 ⑤	・生活行為の方法の変更 ①②③⑥⑦⑧⑨ ・情緒的サポートの依頼 ④⑤ ・生活情報の入手 ⑩
イ. 経済基盤		出費の節約 ⑥ 収入の増大 ⑦ 蓄えの投入 ⑧ 実家からの経済的支援⑨ 友人・近隣からの 情報入手 ⑩	

注) ○内の数字は、生活の構造的要因、家族の生活基盤ごとに共通する内容を示す。

表4 児の出生による生活上の変化の要求に対する対処行動に用いられる家族資源

項 目		内 容	意 味
2) 生活の構造的要因			
ア. 生理的要因	睡眠・休息	時間の確保 ① 規則的生活リズムの確保② 夫婦間の役割分担 ③	・個人資源 ①②④⑤⑥⑨⑩ ・家族資源 ③ ・親族資源 ⑦ ・コミュニティ資源 ⑧
	食生活	夫婦間の役割分担 ③ 方法の変更 ④ 内容の変更 ⑤	
イ. 生産的要因	勤め	時間の確保 ①	
ウ. 家事的要因	家事	夫婦間の役割分担 ③ 方法の変更 ④ 回数の変更 ⑤ 実家からの精神的支援⑥ 実家の家事・育児協力⑦ 友人からの精神的支援⑧	
エ. 家政的要因	夫婦の交流	時間の確保 ① 方法の変更 ④	
オ. 文化的要因	余暇・趣味	時間の確保 ① 夫婦間の役割分担 ③ 方法の変更 ④ 内容の変更 ⑤ 実家の家事・育児協力⑦ 実家からの精神的支援⑨	
カ. 社会的要因	親戚付き合い	行動の選択 ⑩	
	近所付き合い	行動の選択 ⑩	
3) 家族の生活基盤			
ア. 夫婦の健康		セルフケアの実施 ① 夫婦間の役割分担 ② 実家の家事・育児協力③ 実家からの精神的支援④ 友人からの精神的支援⑤	・個人資源 ① ・家族資源 ②⑥⑦⑧ ・親族資源 ③④⑨ ・コミュニティ資源 ⑤⑩
イ. 経済基盤		出費の節約 ⑥ 収入の増大 ⑦ 蓄えの投入 ⑧ 実家からの経済的支援⑨ 友人・近隣からの情報入手⑩	

注) ○内の数字は、生活の構造的要因、家族の生活基盤ごとに共通する内容を示す。

夫婦間の役割分担 ③実家の家事・育児協力 ④実家への相談 ⑤友人への相談 ⑥出費の節約 ⑦収入の増大 ⑧蓄えの投入 ⑨実家からの経済的支援 ⑩友人・近隣からの情報の入手という内容に類別でき、これらから、①生活行為の方法の変更 ②情緒的サポートの依頼 ③生活情報の入手という3つの意味を抽出した。(表3)

5. 家族対処行動に用いられた家族資源

生活の構造的要因及び家族の生活基盤について、家族対処行動として類別したそれぞれ10の内容を、用いられている家族資源によって分類したところ、①個人資源 ②家族資源 ③親族資源 ④コミュニティ資源の3つに分類できた。(表4)

6. 家族内の行動的対処の主体

事例A, B, Cのように広く生活の各領域にわたって行動的対処を実施している事例と、事例F, Nのように限られた生活領域にのみに行動的対処が限定されている事例がみられた。そして、生活領域の広い範囲で行動的対処を行っている事例でも、家族成員個々によるものと夫婦が協同して行う行動的対処の割合において、2つの特徴的なタイプがみられた。(表5)

①家族成員個々の行動的対処が優位なタイプ

事例Aにおいては、すべての生活領域において、

妻のみが行動的対処をしており、夫婦が協同して行う行動的対処はみられなかった。妻は、家族適応に至るためには、夫に協力を求めるよりも自分で対処したほうがよいと述べていた。

②夫婦が協同して行う行動的対処が優位なタイプ

事例Bでは、食生活を除く8つの生活領域で行動的対処を行っていたが、余暇・趣味生活と近所付き合いを除く6つの領域で、夫婦が協同した行動的対処を行っていた。妻は、何事につけても夫と協力し合うのがごく自然だと述べていた。

7. 児の出生による妻の夫に対する認識と家族関係の変化

妻の夫に対する認識の変化は、以下のような内容に類別できた。①夫の置かれている状況がよくわかるという受容的理解の促進②夫はやはり頼りになるという肯定的評価の促進③期待外れだったという否定的評価の付与④思わぬ一面を見出したという新たな一面の発見 そして、これらから、理解の深まりという意味を抽出した。また、家族関係における変化は以下のように分類できた。①夫婦が互いに相手を必要としているという絆の深まり ②児を含む新たな関係の出現 そしてこれらから、関係性の発展という意味を抽出した。

表5 事例別にみた家族内対処行動の主体

項目 \ 事例	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N
健康状態	○	◎	○	◎○△	○△		○			○△	◎	○	○	
家事	○	◎	◎○	◎○	◎	○	◎○	◎○	◎○	◎○	◎	◎○	◎○	◎○
睡眠・休息	○	◎○	◎○	○△	△		◎○	○	○△	○△				
食生活	○		○						○	◎		◎	○	◎
余暇・趣味		△	○	○△	◎△			◎○	○					
親戚付き合い	○	◎	○		○	○	○			○	◎		○	○
近所付き合い	○	○	○	○			○	○			○	○	○	
夫婦の交流		◎	◎	◎								○		
家計	○	◎	◎○	○	◎○	△	○	○	○	○△	○	○	○	○

空欄 対処行動なし ◎ 夫と妻が協同して行う対処行動 ○ 妻による対処行動 △ 夫による対処行動

V. 考 察

1. 児の出生によって要求される家族の生活上の変化

児の出生は、それまでの家族の生活行動の再編成を要求するものであることが明らかになった。具体的には、家族内での行動的、情緒的变化と、家族外部からの変化の両者の要請に迫られ、それに対応するための生活基盤の強化も同時に求められることが確認できた。

第1子の誕生は、家族危機であり危機的な経験である¹¹⁾と言われ、実際わが国の調査でも、母親は当然のことながら、早期乳児期の子を持つ父親の42.6%がストレスを感じると報告されている¹²⁾。これは、一旦出来上がった夫婦二人の生活を再編成するという家族に求められる要求の大きさを指すものであろう。したがって、本研究では、前述したような先行研究の根拠をより明確にできたと考える。

看護職の早期養育期家族に対する援助には、乳児健康診査の場における保健指導があり、その家族に対する援助目標は、保護者が児の健康を保持し、増進する意欲を高め、健全な母子関係の発達を促すこと¹³⁾に重点が置かれている。これに対して、子どもの心身の発達や健康には父親の役割が重要である¹⁴⁾という指摘が数多くなされ、育児をサポートする夫のストレスを明らかにする研究¹⁵⁾も取り組まれ、夫のストレスを軽減する方法が具体的に提起されている。

しかし本研究で、児の出生によって家族全体に及ぶ生活上の変化が要求されることを考えると、児と母親、父親を切り離して援助することは困難であると言える。看護職としては、たとえ、母親あるいは父親の一方との接点から援助を開始したとしても、援助の目標を家族の適応への過程に定め、家族全体を視野に入れた援助が必要である。

2. 生活上の変化の要求に対する認識

多くの生活上の変化の要求を家族がどのように受けとめているのかは、ストレスに対する現状認識と意識的努力に大別できた。そして、ストレスに対する現状認識は、自分自身や家族にとって①無害、あるいは肯定的であるか②ストレ

スフルであるかの二つの認識のあり方に分類できた。つまりこれは、家族が生活上の変化の要求が自分や家族にとって「危ういもの」であるか否かの主観的評価である。また、家族対処行動は、家族が採択した具体的な行動と認識とからなるが、認識における意識的努力は、家族ストレス対処行動のうちの認知的対処と言える。HillのモデルにおけるC要因(ストレスの認知)は具体的には、家族メンバーがその出来事を、あたかもそれが彼らの地位や目標に対して、脅威であるかのように扱うかどうかである¹⁶⁾が、本研究においてもこれと同様の結果が得られた。以上のことから、児の出生によって家族に要求される生活上の変化に対する認識は、家族ストレスに対する主観的評価、すなわち家族ストレスが脅威となるか否かの評定と認知的対処を含むものであると言える。

3. 家族対処行動と用いられる家族資源

面接から得られた家族対処行動には、行動的対処のみで、認知的対処はみられなかった。そして、行動的対処の内容は、生活全般にわたって、新たなバランスを獲得しようとする行動がみられ、実際の行動としては、生活時間と各生活行為の方法の調整が、情緒や認識の側面では、周囲からの情緒的サポートや知識を得たり、慎重に判断していることが、明らかになった。そして、対処行動に用いられている家族資源としては、家族成員の個人資源、家族資源、実家等の親族資源、友人等のコミュニティ資源があり、これらの資源をどのような比重で採択し家族適応に至るかは、家族によって異なっていた。

これらの結果は、早期養育期における家族援助に以下の3点で有益な示唆を与えたと言える。すなわち第1点は、家族成員、夫婦、親族、コミュニティという家族資源の各レベルを確認できたことである。McCubbinは、家族資源を個人、家族、コミュニティという3つのレベルでとらえている¹⁷⁾。しかし、わが国における早期養育期家族では、親族、特に実家は、手段的、経済的サポートの供給源となっていた。妻が母になるための過程において、特に産褥1カ月は、「さと」が重要な

役割を果たす¹⁸⁾ と言われているが、それ以後も重要な機能を果たしていると言える。

第2点は、家族の対処行動を査定する基本的な視点が確認できたことである。Friedman は、家族中心の看護職の役割として、現在の健康問題にうまく対処できる技術を身につけるように援助する健康教育者としての機能¹⁹⁾ をあげおり、アセスメントにあたっては、個々の家族員と家族の両者に焦点をあてなければならない²⁰⁾ と述べている。こうしたことを基盤にして、本研究から得られた家族対処行動のなかでも行動的対処に関する結果を整理すると、そのアセスメントの基本的な枠組みは、①家族成員個々の生活時間、生活リズム、及び判断、②家族生活の具体的行為の方法(内容、回数、夫婦間の協力の現状、親族(実家)、友人からの協力の現状)③夫婦間、親族(実家)、友人から受けている情緒的サポートの現状 ④生活情報の入手状況の4点に整理できると言える。

第3点は、採択される対処行動は多様であることが確認できたことである。例えば、行動的対処はその主体によって、家族成員個々が優先するタイプと、夫婦が協同して行う対処行動が優先するタイプがみられたが、そのいずれもが、家族適応に至っていることを考えると、看護職は、その家族の選択を尊重し、家族対処のあり方を柔軟に捉える必要があると考えられる。山根は、ライフス

タイルの多様化に伴う家族の変化は、本質的に形態の変化よりもむしろ観念の変化を意味する²¹⁾ と述べている。これは、人々が家族に求めているものが多様であることを示すものである。家族の持つ能力を引き出すためには、各人の価値観とそれに基づく対処方策の選択を尊重した援助が必要であろう。

4. 児の出生による妻の夫に対する認識と家族関係の変化

家族の発達課題を順次に遂行しえていくことは、家族成員間に個人的発達を促進すると同時に、家族統合の安定をもたらす²²⁾。そして、Olson は、家族成員が相互にいだく感情的絆を家族の凝集性とし、状況的発達のストレスに応じて関係を変化させる能力を家族の適応性と定義し、両概念で家族統合の安定を測定している²³⁾。この二つの概念を用いて本研究で得られた、「夫婦の絆の深まり」「児を含む新たな関係の出現」という家族関係の変化をみると、前者が凝集性を、後者が適応性を示していると考えられる。すなわち、児の出生による家族生活上の変化の要求に適応することによって、家族統合が増すことが示唆された。

5. 第1子を養育する家族の適応モデル

本研究で得られた結果から、図2に示した適応モデルを修正し内容を加えて、第1子を養育する家族の適応モデルを作成した。(図4) 修正した

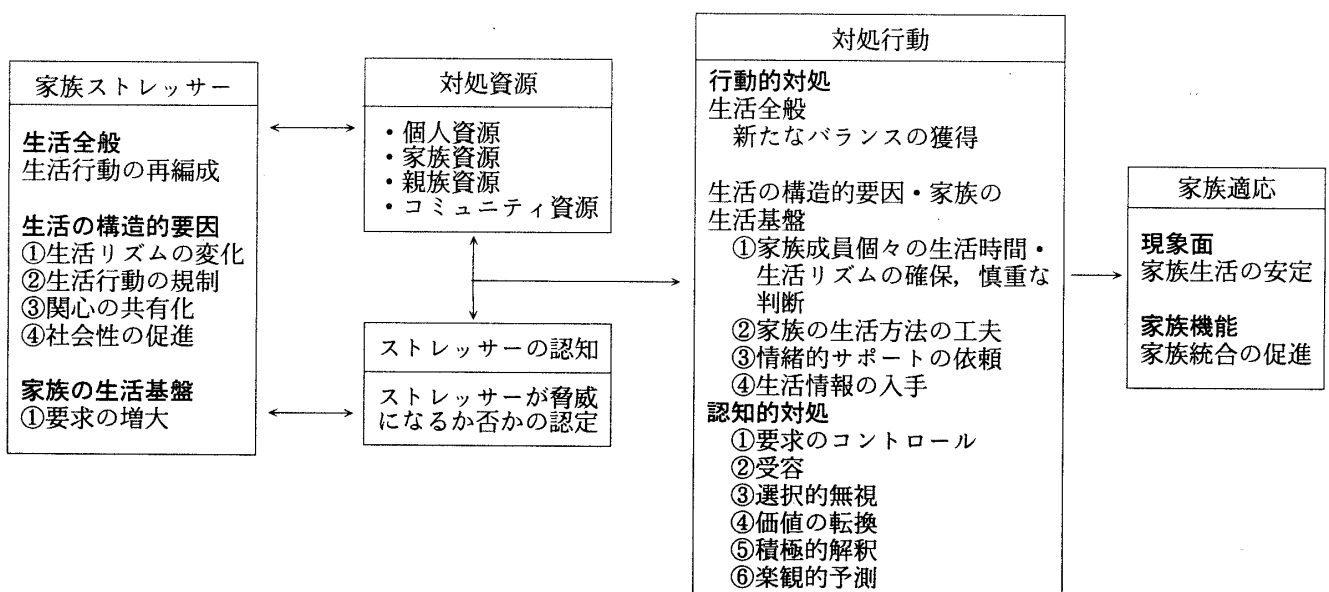


図2 第1子出生による家族の適応モデル(修正版)

主な点は、児の出生による生活上の変化の要求に対する認識は、家族ストレスが脅威となるか否かの評定と認知的対処を含むことが明らかとなったため、認知的対処を対処行動の枠組みに入れ、前者をストレスの認知の内容として加えた。また、家族適応を家族機能、すなわち家族の統合性の変化によって検討したところ、家族統合の促進が認められたので、それをモデルに明記した。そして、家族ストレスと家族資源、対処行動について、結果から得られた内容及び意味を加えた。

実際に家族を援助する場合には、各事例におけるこれらの適応過程の全体像を明らかにしたうえで各変数間の関係を捉えることが必要となる。今回提示したモデルは、この全体像及びこれらの相互関係を査定するうえで有効であると考えられる。

6. 今後の課題

本研究では、児の出生後3～4ヶ月の一時点での調査であるが、家族適応は、出生直後からの連続的な過程である。調査以前の家族の体験や認識は、当然研究結果に影響を与えるものと思われる。このような意味で、今後は、経時的、追跡調査が必要であろう。

引用文献

- 1) 森 恵美：看護研究，27（2-3），43
- 2) 中村安秀：児童虐待の世界の流れと日本の現状，保健婦雑誌，49〈10〉，804，1993
- 3) 森 恵美：前掲書1)
- 4) Marilyn M. Friedman：FAMILY NURSING, Theory and Assessment, Appleton-Century-Crofts, 80-87, 1986
- 5) 前掲書4)，58-74
- 6) 前掲書4)，332
- 7) 石原邦男編：家族生活とストレス，30，1985
- 8) 前掲書7)，365
- 9) 前掲書7)，35
- 10) 松原治郎：家族生活の社会学，学文社，1979
- 11) 前掲書4)，86
- 12) 久保田君枝，那須田あづさ：母性衛生34〈1〉，83-87，1993
- 13) 厚生省児童家庭局長：診査及び保健指導に関する実施要領，1966
- 14) 小此木啓吾他：周産期の臨床と父親の役割，周産期医学，18〈1〉，115-119，1988
- 15) 伊藤智啓：育児ストレスを軽減するには，現代のエスプリ，300，至文堂，1992
- 16) 前掲書7)，24
- 17) 前掲書7)，33
- 18) 中込さと子他：第1子出生を通しての家族個々の役割取得と看護介入，第20回日本看護学会集録-母性看護-日本看護協会，142-145，1989
- 19) 前掲書4)，36
- 20) 前掲書4)，44
- 21) 山根常夫：家族の現在とゆくえ，看護研究，22〈2〉，2-13，1998
- 22) 前掲書7)，401
- 23) 前掲書7)，401
- 24) 前掲書7)，401
- 25) 前掲書7)，376

Summary

This study was undertaken to make clear the family adaptation process subsequent to the first child birth. Data were collected from 14 families by semi-structured interview which was based on existing family stress theory models. Then we chose meaningful statements for the data of family stressor, family resources, appraisal of stressor, family coping behavior and family adaptation. Contents of the same quality and meaning were yielded.

The meanings were the followings. 1. As family stressor, requirement of reframing of life behavior. 2. As family resourced, personal, family, relative and community resources. 3. As appraisal of stressor, estimation of being threat or not. 4. As coping behavior, behavioral coping and cognitive coping behavior, for example acquiring of new balance in whole life-style, diversion of value

and positive interpretation. 5. As family adaptation, promotion of family integration.

Including these results, we created the modified model of family adaptation process subsequent to the first child birth. We validated the framework of nursing care to promote family adaptation.